山といたし候。高さは三千八百五十七尺余にて、又越の高嶺とも申し候。火山質の山にて登るにもやゝ困難を感じ候、頂上に金北山神社あり、大彦命迦具突智命を合祀いたし、國人の尊崇淺からず候。男子七才に至れば御山詣と稱して登山いたす程に候。承久の昔にや、素朴なる島人院をお誘ひ申し上げ詣でし折、山麓まで行かせ給へるに、金北山樣白馬に跨りてお下あり、院の御前にて平伏せさせ給へり。やんごとなき上つ方とは知りたれども如何程といふ事を知らざりし島人、己が最高の尊崇といたせる神樣がかく遊さるゝに於ては容易ならぬことなりとて、その後いと懇になし奉りたりとの傳說有之候。

阿新丸隱松

「かくれつる蔭はなか〳〵あらはれて名も空高くなれる松哉」日野公の一子阿新丸父の仇本間三郎を切りて逃るゝ途中追手の目を暗ましてれ隱たりといふ陰松は、眞野村阿佛坊の妙宣寺の境外にこれあり候。妙宣寺は弘安元年遠藤左衞門爲盛入道日得上人の開基に候。日蓮上人配流のはじめ獨日得上人保護せられ候

ひしが爲めに咎を蒙り住所をはなれしも、終始かはることなく日蓮上人につくされしとのことに候。今なほ雲に聳ゆる五重の塔は日得上人の志を示すやうに在せられ候。又日野中納言謫居の八年間常にこの寺に寓せられし由にて、其冥福を祈らむがために手寫せられし法華經を寶物として藏するよしに候。(なほ日蓮上人自筆の曼陀羅もありとか申し候)。日野公の墓もこの寺の境内に御座候。

檀風城趾

「秋たけし檀(まゆみ)の梢ふく風に雜田(さはた)の里は紅葉しにけり」守護本間山城守の居城雜田城を檀風城(だんぷうじやう)と申すは日野公のこの歌によるとの事に候。「身を秋の霜に枯れにし檀原けふ來て見ればただ風のこゑ」、實にこの城趾も縣道の傍に隴圃となりて存するのみにて候。日野公のながき恨みを殘して去られたるも、阿新丸の仇を復して本懷をとげたるも皆、この檀風城内のことに候。そのあたりの有樣は謠曲檀風を御覽下され度候。かしこ。

◉鹿兒島より　加賀山　貞

さらぬだにわびしき今日此頃を去月(九月)八日以來病床に起臥する身と相成候てひときは最近過去四年間、此頃の皆樣の御上御なつかしき折柄の御便りうれしく拜見致し候。何か寄稿せよとの御事なるも右の次第にて未だ何するも醫師より許されず候まゝ折角の仰を不本意ながら失禮致すべく御ゆるし下され度候。何しろ筑紫のはてに候へば風俗習慣のみにても隨分めづらしき事ども多くこれあり皆樣に御話申上度候まゝ恢復の上にて御しらせ申上候。乍末時候御いとひ被遊度先はとりあへず御返事迄。かしこ

私病氣は當分靜養すればよろしかるべく御心配下さるまじく候。

◉備中玉島より　田中元惠

御葉書嬉しく頂戴致し候。私よりこそ疾く御禮申述ぶべきを申譯なく候。御忙しき中をそれぞれの御世話厚く御禮申上候。實は私此當地着後道中の勞れか、暑さあたりか、はた又ホームシックとやらか、高熱に下痢さへ加はりて學校も暫く欠勤致しつれづれと獨りこもり居の秋のあはれと申候事も今年初めてしみじみ味ひ申候。其後校長の逝去といふ意外の出來事に殆んど氣抜けいたせし感これあり候ひしが其後は同僚の中二人迄病氣の爲大方二月の欠勤これあり爲めに大多忙を來し只今は一週廿六時間うけけもつ樣の始末とて何れも樣に大御無沙汰と相成しわけあしからず御ゆるし願上候。思へば附屬高女に地歷三時間の爲にギウギウいたしたる昔は結構なるものに候ひき。それはさておき今日は一つ自慢のいたし度事これあり候。そは私受持の生徒六十人と私との間には些の隔てなく彼等の嬉しみ悲しみ何れ皆私の知り得ざるはまづこれなかるべしと申す事に候。當校には生徒日誌とて學科の復習、家事の手傳修養通信等の欄ある帳を持たしめ一週一度、受持の檢査これあり候。私は其修養欄を利用して毎日必ず反省いたさせ微細に記入せしめ申候が